

生活と科学 (Life and Science)

福田 豊

Fukuda Yutaka

我々を取り巻く生活環境の構成成分は、複雑多岐に分かれ、それらの本質を見極めることはなかなか難しい。生活工学という学問分野が、どのようなものであるか、私は十分理解しているわけではない。そして、日常生活に関わる面白いテーマを相手にすると、多種多様な相互作用が有り過ぎて、どこから手を付けていくか、途方に暮れるばかりである。しかしながら、自然科学であれば問題解決の手法は、そんなに異なるはずはないと思われる。問題となる多数の相互作用を一つ一つ分離して解き明かし、次にそれらの全体を支配する相関関係を理解していくことが、一つの方法になるのではないかと思われる。たとえば、実験のための機械類にしても、ボタン一つで操作は完了ということが主流となっていて、実に便利このうえないようになってきた。しかし、精度は確かに今の方が良くなってはいるけれども、いざ故障となった場合にどこをどう直せば良いのか、皆目検討がつかないことが多い。一昔前は、そうではなかった。測定機器などは原理的に良く分かるものが多く、故障に際してもその原理を一つ一つ追っかければ自分でも修理できた。

私の研究室で学生と話をすることのひとつですが、大学で学び研究する際大切なことはなんでしょうか。もちろん自分の研究テーマに興味を持って取り組むことですが、それらの研究の中で何が本質か、解決せねばならない中心課題は何か、それをどの様に解き明かしていくか？を鮮明にすることでしょう。いろいろのアクセサリはできるだけ除外したい。理学の分野ではその傾向が強いように思われる。生活工学ではどうでしょうか？

自分の研究分野の化学を見回して感ずることであるが、日本、いや世界の中で、理学と工学の境は何か、そのようなものがあるのかということ考えた時、今はほとんどその境界はなくなりつつあるということではなかろうか。二つの独立した領域があるとは思えない。本質はかわらないものであろう。強いていうならば、対象とするものや解決したものをどのように表現するかというところに、いささかの視点の違い、表現の違いが有るのではないか？

従って、今、必要なことは、自然科学分野として、理学と生活科学の研究者がお互いの分野を理解・尊重しあいながら、どのように協力しあえば、お茶の水女子大学に素晴らしい研究の場ができるのかを考えることではないだろうか。折しも今、国立大学が法人格を持つことの議論が進められ、護送船団方式からそれぞれ個性輝く大学に生まれ変わろうという時があります。我がお茶大がどういう方向に進むかの選択が迫られている時だと思います。少なくとも自然系と文系と2つのCOE(Center of Excellence)を立ち上げていかねばならない様に思う。生活工学研究会が、その一翼を担ってよりよい研究と教育をますます進展されるように祈って止みません。

(お茶の水女子大学学生部長)